忘れ得ぬ恩師と東南海地震

三中33回　三宅　仁

菊地周一郎先生―先生と一度、英語でお話ししたかった―

昭和十六年四月、受験番号二五〇の僕は幸いにも京三中に入学出来て、初めて英語を学ぶことになった。

英語の担当は、東京外語を卒業されたばかりの新進気鋭の菊地周一郎先生。先生は当時としては背がずば抜けて高く、この年に撮った京三中教員の写真を見ても、三十三名の先生方の中で一番高いのがよくわかる。

先生は授業中、故郷の北海道についてよく話された。寒さ厳しい冬の北海道、雪に閉じ込められる人達の生活をじかに先生から聞くのは大変興味深かった。

面長で、頭髪は綺麗に七三に分け、服装の好みも良く、細いフレームの眼鏡を掛けておられた。ハイカラだった。だれが見ても、先生は英語の先生に思えた。

京三中に入る前から僕には一抹の不安があった。六年生の時の担任から「三宅は五十音が正確に言えないぐらいだから、中学に入ったら英語で苦労するだろうな」と言われていたことが、頭から離れなかった。しかし、一方では「よーし！英語をやるぞ！」という激しい意気込みはあった。

New Light Readers という教科書を開き、ちんぷんかんぷんの横文字を見た時、今までとは違った新しい別世界に入るような興奮を覚えた。

今もよく覚えているのは、子供が駒鳥（robin）と鳩（dove）に呼び掛ける詩のような情趣のある、実にリズミカルな文である。数回読むと、すらすらと唱えられる。（声を出して読んでください。）

Robin! Robin!
You are a bird.
Sing, Robin, sing!

Come, my dove!
You are a bird, too.
Coo, my dove, coo!

しばらくすると、菊知先生は東京外語の優等生で、在学中、

て来た。先生のリーディングは発音・抑揚・リズムが素晴らしく、まるで英米人が読んでいるようで、みんなうっとりとして聴いていた。

英語を教えることに非常な情熱を持っておられ、正確な発音だけでなく、英文法についても厳しく教えられた。

ある日のこと、英文の主語が三人称・単数で、動詞が現在の場合には、その動詞の語尾に s または es が付く、ということを口酸っぱく説明された。

その後、黒板に五、六人の生徒が出て「彼は英語を話す」という文を英文に直した時、一人が誤って He speak English. と書いて、speak に s を付けなかった。突然カッとなった先生は、ミスをした生徒の頬を平手で強く叩いたのである。先生の顔は見る見る紅潮し、その後、授業を続けることが不可能になった。恐らく、生まれて初めて生徒の頬を叩いたことで心がひどく動揺されたのであろう。僕は、先生は教えることに一所懸命だなあと感心した。

先生は、新しい課に入る前には、テキストの概要を十分ぐらいかけて英語だけで説明された。これを聴きながら、自分もあのように流暢に英語を話せるようになりたいと思い、英字新聞を読んでおられるのを見ては、自分もいつか読めるようになれ

ばいいのになあと思った。

先生はよく風邪を引き、授業中何度も鼻をかまれ、咳き込まれた。先生はひょっとすると、肺結核にかかっているのではないか、とみんな心配した。

ある日、僕は職員室に呼び出された。「三宅は英語の成績は優秀だ。英語の勉強はそう熱心にしなくてもよいから代数・幾何・理科をもっと勉強しないとだめだ。特に、幾何は赤点だ。この成績では進級出来ないね」と言われた。菊地先生は励ましのつもりであっただろうが、僕の肩を数度教鞭で叩かれた。尊敬していた先生に叩かれたのが残念で、つい涙を流してしまった。

先生は僕の泣き顔を見てびっくり、「三宅、もういいよ。帰りなさい」と、悲しそうに言われた。

この後、一カ月ほどは数学に力を入れたが、また元の状態に返り、僕の学習は文系の英語・国語・漢文に限られ、他の教科の勉強は、テスト前の一夜漬けに終わっていた。

昭和十九年になると、先生は応召され、戦地に向かわれた。終戦後しばらくは、先生の消息はなく、先生のあの虚弱な体では、どこかで戦病死されたに違いない、と思われていた。

あとで判ったことだが、昭和十九年七月から私達が学徒勤労

動員で愛知県半田市の中島飛行機株式会社で日夜飛行機の増産に励んでいた頃、そして十二月七日の東南海地震で十三名の学友が、倒壊した工場の煉瓦壁の下敷きになって圧死した時、先生は満州におられたのであった。

この地震で僕は重傷、十四人目の殉難学徒になるところを九死に一生を得、その後、相当長い間、地震ノイローゼで悩み、もう再起出来ないかもしれないと心配していた。

しかし、ある事が切っ掛けになって、幸いにも元気を取り戻し、昭和二十二年四月、同志社外事専門学校米英科に入学出来た。

入学して一カ月ばかり経った頃のある日、家の門の所に、一人の長身で、ぶくぶく太った人が立っていた。色褪せた軍服姿だった。

「三宅君、わかるかい、菊地だよ。ソ連に抑留されていたが、数日前にやっと復員できた。君が地震で重傷を負ったと聞いたので見舞いに来た・・・」――紛れもなく久し振りに聞く先生の声である。

しかし、どう見ても、英語を習った頃の先生の面影はない。顔が真ん丸くなり、体は太りに太って、かつての弱々しい先生ではなかった。

嬉しかった。僕を忘れずに、帰国後すぐに訪ねて下さるなん

て――。

昭和三十年頃であった。京三中のかつての学友から「菊地先生は嵯峨野高校に在職中に肺結核ですでに亡くなられている」と聞いた。

それから十年後に、菊地先生と同じ学校に勤めておられたW先生から、先生の最期のお言葉を聞くことになった。

「まだ死にたくない。残念だ！　無念だ！」

嗚呼。僕は今も先生から英語の手解きを受けたことを何よりも有り難く思っている。

先生と一度、英語でお話ししたかった――。

草薙武吉先生 ―僕の「命の恩人」―

草薙先生が、私達の「国語」の先生として登場したのは確か、昭和十八年の四月、三年生になった時である。背はそう高くなく、色白で、顔が真ん丸く、よく太ってまるで達磨さんのようだった。

歳は三十二、三。国学院大学で神道を専攻されたのだが、どこかのお坊さんのような風貌であった。

最初の授業で、ご自分の人生訓を述べられた。「人生は七転び八起き、何度転んでも、おっと、どっこい、と起き上がるこ

とが大切である」と。それからというものは、草薙先生と呼ぶ者はほとんどなくなり、みんな「どっこい（先生）」と呼ぶようになった。

「国語」で何を習ったのか、さっぱり思い出せない。ただ、黒板に書かれる字がばかに大きくて、例えば大、走、美などの漢字の最後の一画を必要以上に延ばされる癖があった。

先生の講義の内容で一つだけ今も覚えていることがある。現、法隆寺の再建・非再建についてである。再建・非再建のどちらの説を信じておられたのか思い出せないが、異常な情熱を注いで数回この講義を得々とされた。

昭和十九年四月、僕が四学年に進級して四組に入った時、先生が担任になられた。

しばしば僕の家の「家庭訪問」をして下さったので、お帰りには、父・母が自ら田畑で作った米や野菜を沢山持って帰っていただいた。戦争末期で、食糧難の時であったので先生は大変喜ばれた。

昭和十九年の夏、七月五日から京三中の三、四、五年の全生徒は学徒勤労動員令により、京都を遠く離れて愛知県半田市の中島飛行機株式会社の本工場や分工場で働くことになった。

海軍艦上攻撃機「天山・B６」、海軍艦上偵察機「彩雲・C６」の増産のために、朝八時から五時まで働き、時には夕食後三時

間以上も残業した。食べ物が乏しくて、空腹で悲惨な思いをしながらも頑張っていた。

やがて秋になり、戦局がますます日本に不利になって来た。冬になった。十二月七日、午後一時三十六分、突如、大地震が発生した（東南海地震、マグニチュード八・〇）。震源地に近かったため、私達がC6の部品を作っていた元紡績工場の煉瓦造りの分工場は、一瞬にして倒壊した。

この工場で作業中であった僕は、地震の激しい振動で一度は床に倒れたものの、必死に三メートル先の非常口の方に這おうとした。

運悪く、巨大な煉瓦の外壁が内側へどっと倒れてきたのである。

——見渡す限り、赤や紫の蓮華草の咲き乱れている畑—その中に、一人の少女が僕のはるか前をぴょん、ぴょんと跳んで行く。

振り返って僕の方を見る。

「ひとしさん、はやくおいで—」と僕を呼ぶ。追いつかねば、と思い、走ろうとするが、体の自由が利かない。

「待って！」と必死に声を張り上げようとするが、喉に声がつまって出て来ない。

「待って！　待って！」どうしても声が出ない。—意識

がよみがえる——

そうだ！　さっきの地震で工場が倒れてその下敷きになっているのだ、と気付く。苦しい。息がつまる。

朦朧とした意識の中で「助けて！　助けて！」と叫び続ける。あたりは暗闇、何の音も耳に入らない。また意識がなくなる。

草薙先生の声が聞こえた。「三宅、頑張れ！」励ます友達の声もする。

…………………………

僕の回りで四組の学友九人と、他の組の者四人が圧死、僕は将棋倒しに倒れた友人の間に挟まったのか、直接大きい煉瓦の塊が体に当たらなかったのか、三時間後に救出され、生き残った。

煉瓦壁の下から「助けて！」と叫ぶ僕の声が先生の耳に入らなかったら、多分間もなく僕は命を落としていたかもしれない。強い全身の打撲と右上腕骨の骨折、しばらく続いた呼吸障害で歩行出来るまでには三カ月かかった。歩くようになってからも地震ノイローゼが続き、再起出来ないのではないかと悩み続けた。

やがて終戦。長い間、草薙先生にお目にかかる機会はなかった。久し振りにお会い出来たのは、昭和三十九年十二月五日、

円町の竹林寺で営まれた学友十三名の二十回忌法要の席であった。藤森校長はじめ諸先生、御遺族の方々、そして多くの同窓生が一堂に会し、新幹線の開通や終わったばかりの東京オリンピックを見ずして逝った級友達の無念さを語り合った。それ以後は、恒例となった毎年十二月上旬の同窓会で何度か先生のお元気な姿に接していた。

先生の四十代、五十代は久美浜高校、東舞鶴高校、石原高校の校長を歴任され、退職されてからは東山中・高校の副校長として数年勤められた。

先生は若い頃から糖尿病に罹っておられ、合併症を起さぬよう十分注意しておられたようだが、体重が常に九十キロをオーバー、血圧も相当に高かったようであった。

平成五年三月の上旬、先生は糖尿病が悪化し、視力が衰えて、八木町の南丹病院に入院された。すぐにお見舞いに行くと、息をするのも苦しそうで、ベッドに座ってハァーハァーと喘いでおられた。こんな容体ではもう回復なさらないのではと心配したが、数カ月後に、「少し良くなったので退院して、家で静養している」と、お電話を頂いた。

そしてこの年の冬、十二月七日、全日空ホテルで殉難学友十三名の五十回忌の法要を営んだ際には、先生は病気を押して、奥様に付き添われ、車椅子で出席して下さった。

先生はいつも言っておられた。「あの地震で亡くなった十三名を思うと、痛恨、胸が痛む」と。

先生は僕の恩師というよりは、命の恩人である。

地震ノイローゼ——東南海地震での心の痛手——

運よく三時間後に煉瓦壁の下から救出され、担任と学友に戸板に乗せてもらい、ある建物（今も、どこであったか判らない）の中に運ばれた。

そして夕方、応急の病院になった半田高等女学校の講堂に移された。医者は一人もおらず、翌日八日の深夜、名古屋の日赤から医者が来るまで待たねばならなかった。この間三十数時間、左腕の痛みと息苦しさにもがき、下半身には全く感覚がなかった。

二週間経った。早く京都へ帰って、もう一度大きい病院で治療を受けた方が良かろうという医者の診断により、十二月二十二日の午後、半田を去ることになった。

父が京都から迎えに来た。父に手を引いてもらい、痛む体で喘ぎ喘ぎ歩き、半時間後に国鉄半田駅に着いた。午後一時過ぎの列車に乗るために構内で待っていたら、突然、空襲警報が発令された。列車の到着が相当遅れるという。

しばらくして空を見上げると、B29が三十機ばかり、白い絹布のような飛行雲を引きながら上空を飛んで行く。駅前の防空壕からこの編隊を見上げながら、無念で胸が一杯になった。

三時過ぎにはやっと列車に乗れた。岐阜あたりで今度は豪雪に見舞われ、列車は長時間立ち往生し、京都駅に着いた時にはもう夜はほんのり明けていた。

家に着いてからも心は落ち着かず、ひどい地震ノイローゼにかかってしまっていた。ちょっとした振動でも心臓がドキドキし、息苦しくなり、どっと汗が出た。

畳の上で寝られず、表口を入った所のタタキにむしろを敷き、その上に布団を敷いて寝た。いち早く外へ出られるように備えたのである。

一月、二月になると、米機の大阪空襲が激しくなり、爆音が家まで聞こえた。朝、南の空は煙で灰色一色になっていた。体のあちこちが痛む。左腕、左手、胸部全体に厚いギブスが巻きついている。心臓の鼓動が激しい。

こんな状態で、夜なかなか寝付かれず、食欲もない。もう回復出来ないのではないかと思い始めると、焦燥感に駆られ、ますます憂鬱になってくる。

一月中旬、母に付き添われ、京都府立医科大学附属病院へ行き、外科医、河村謙二郎先生の診察を受け、ギブスを取り外し、

X線を撮ってもらった。

ポキンと折れた上腕骨は一応繋がれているが、一本の真っ直ぐの骨になっておらず、折れた部分が数センチ重なっているではないか!

このX線の写真を見ても先生は冷静であった。「折れた箇所は何とか繋がっているが、このままでは左腕が右腕よりも数センチ短くなってしまう。手術をしてもう一度繋ぎ直したいが、手術の成功率は五十パーセントだね。今晩よく考えて、手術をするかしないか、明日私に返事をしてほしい」と言われた。

その晩、両親に「手術を受けて、早く治してもらい、もう一度友達のいる半田の工場に戻りたい」と言った。父と母は口を揃えて、「もうそのままでいいじゃないか。脚の短いのは目立つが、腕なんか少し短くなっても、日常生活にそう差し支えないし、だれにもわからない」と言って僕を説き伏せようとした。

実は僕も、この手術を受けることが内心怖かったたし、悩みに悩んだ挙句、父母の説得に従って手術をしないことに決めた。

両親はどこで聞いたのか、彦根に骨接ぎの名医がいて、他の病院では治らない骨折でもちゃんと治してくれるそうだ、と言う。本当かなあ、と半信半疑のまま、僕はある日、父母に無理矢理に彦根へ連れて行かれることになった。

京都駅までは電車で何とか無事行けたのに、列車がゴトン、

ゴトンと発車すると、僕の心臓は異常な反応を示し、目の前が真っ暗になり、汗がどっと出て来て、座席に顔を伏した。息苦しい。トンネルを二つ通って大津駅で列車が止まった時、「ここで降ろして！」と父母に必死に頼んだが、父は「もう少し我慢せよ。もうすぐ彦根に着くから」と言う。

彦根は降り積もる雪で一面真っ白だった。その名医の家に辿り着くと、もう座る余地がないぐらいの十畳ばかりの部屋に、三十人ほどの患者が順番を待っている。先生は相当な年齢で、長い顎ひげを生やした、田舎のおじいさんのようだった。腰も曲がっていた。

数時間待ってやっと診てもらえた。先生は僕の左上腕に手を当て「折れた骨はもう治っている。大丈夫、大丈夫、心配しなくてもよいよ。しかし少し左手が短くなるかもしれないよ」と慰めるような口調で言われた。

両親はまた「不幸中の幸い。脚でなくてよかった。もうそのままにしておいたらよい」と、僕に言い聞かせた。

春になった。四月の中頃、一年生の時の担任、長尾伴七先生が、家に来られた。

「三宅君、君が地震ノイローゼになっていると聞いた。寝てばかりいたらだめだよ。一度学校へ来てみないか。君に向いた仕事があるから」と言われた。「何ですか？僕に出来る仕事と

は?」と聞くと、先生は「一、二年を教える教練の助手だ。今の配属将校は大谷大学と兼任で、あまり三中へ来られず、それに五十嵐教官も老齢で、そう多く授業を持てないので学校は困っている」ということだった。

僕は迷った。「この腕、この体、この精神状態では、下級生に教練を教える助手が勤まるはずがありません」と答えると、先生は「出来ないとわかったらすぐ止めたらよい。一度頑張って学校へ来い」と励まして下さった。

先生の大きな声に圧倒されて、僕は小さい声で「明日から学校へ行きます」と返事してしまった。

学校教練の助手―張り切った四カ月間、そして終戦―

昭和二十年四月中旬、久し振りに京三中の門をくぐり、校長室に入った。

藤森校長と長尾先生がおられ、校長から直接辞令を頂いた。

> 三宅　仁
> 本校教練助手ヲ命ス
> 昭和二十年四月一日
> 京都府立京都第三中学校　校印

長尾先生は「三宅、しっかりやってくれ」と、いつもの大きい声で励まして下さった。

教練の教官室に入ると、私達が三年間、教練を習った、もう定年間近の五十嵐兵蔵先生と、もう一人四十歳ぐらいと思える陸軍大尉の軍服を着た人が座っておられた。

大尉は僕に「自分は落合だ。この四月から三中の配属将校に任命されたが、大谷大学との兼任で、週に半分もここへ来られない。あとは五十嵐教官と君達でやってくれ」と言われた。なお「自分は中支で左手の甲に貫通銃創を負い、自由に手が動かない。中学一年、二年の生徒を見ていると、大学生と違ってみんな大変小さい。こんな幼い生徒達に、自分は厳しい訓練をさせたくない。この子供達はもう戦争には役に立たないと思う。まあ、適当に教えてやってくれ」と、悲観的なことを言われた。筋肉隆々、恰幅がよく、笑われると大変優しい顔になる軍人であった。

早速、翌日から新入生と二年生の授業を始めた。まだ左腕は思うように動かなかったが、なんとか下級生にわからないように工夫した。不動の姿勢（気を付け）、号令、点呼、速歩行進、銃の担い方、射撃姿勢、匍匐前進などを教え、雨天の日には、教室で軍人勅諭の暗唱などをさせた。日毎に新しいことを教えるのは骨が折れたが、やり甲斐があった。

ある時、教官室から運動場での訓練をじっと見ておられた落合大尉があとで褒めて下さった。五十嵐先生には、「君は地震

ノイローゼになっていると聞いていたが、元気になったね。その調子で頑張れ」と励まされた。

一、二年生とも、僕の言うことを真面目に聴き、命令通りにやってくれた。しかし、今、後悔していることが一つある。戦時下では普通であったとは言え、下級生の顔を何度か殴ったことである。助手の身で全く行き過ぎた行為であった。

七月下旬、暑い日が続いていた。五十嵐先生は僕を呼び、「三宅、アメリカ軍の空襲がもし京都を標的にした場合、学校と銃器庫は焼かれてしまうだろう。そこで、銃器庫に在る三八銃と村田式歩兵銃の半分ほどを他の場所に移すことが会議で決まった。鷹ヶ峯の光悦寺の近くに、在校生のお父さんが住職をしているお寺がある。急な話だが、明日、銃をその寺まで運んで貰いたい。もう向こう側とは話がついている」と言われた。

翌日、二年生を十人ほど集め、銃器庫から二百ばかりの銃を取り出し、大八車に積み、途中で落ちないようにしっかり括りつけた。

北大路千本までは平坦な道であったが、ここからは急な坂道で、容易に車が動かない。大粒の汗をかき、喘ぎ喘ぎ目的地のお寺にやっと着いた。

住職が出て来られた。「三中から来ました。銃を運んで来ましたのでよろしくお願いします」と伝えると、住職は、車に積

んだ銃をじっと見るなり、「困ったなあ。こんな大事な物を預かったらあとで責任が生じる場合がある。私は学校側に、受け取って預かるとははっきり言っていない。気の毒だが、持って帰ってほしい」とおっしゃる。

すぐに帰るわけにはいかず、住職と押し問答を半時間ほどする。すると、上品な奥様が出て来られた。「生徒さん達が折角しんどい思いをしてここまで運んで来られたのですから、預かってあげては如何ですか」と私達に味方をして下さった。

住職はまだ抵抗をしておられたが、しばらくすると、観念されたようで、「よろしい。倉の中に入れなさい」と言われるや否やその場を去られた。嬉しかった。

夏休みに入った。そして、八月十五日正午に玉音放送を聴き、夕方になって、これが終戦を告げる天皇の御言葉であることを知った。

翌々日十七日に学校へ駆けつけた。教官室に入ると、五十嵐先生が一人、机に顔を伏せておられる。僕を見た時の先生のお顔は今も忘れられない。目に涙がにじんでいた。

「三宅、ようやってくれた。しかし、もうおしまいだよ。苦労をかけたなあ。そのうちアメリカ軍がここへ来て銃器庫に在る物を一切没収するか、運動場で焼き払ってしまうだろう。今日、これから銃器庫に入って、欲しい物があれば何でもよいか

ら持って帰ってくれ」と涙ぐみながら言われた。「先生、そんなことは出来ません。僕は何も要りません」と断った。

にわかに先生は立ち上がって、続器庫に入り、手に飯盒をぶら下げて帰って来られた。

「三宅、これだけは持って帰ってくれ」と何度も言われるので頂くことにした。

五十嵐先生と別れ、飯盒を持って校門を出た。なぜか電車に乗る気もせず、とぼとぼと三時間もかかって修学院の家まで歩いて帰った。途中、日本はこれからどうなるだろうか、と思うと、何とも言えない絶望感に襲われた。

秋になった。五十嵐先生のことは忘れられず、一度、先生のお宅を訪ねた。家の田畑で採れた米や野菜を持参すると、「有り難う。有り難う。これでしばらく助かる」と頭を下げられた。もう先生のお顔からは、日露戦争の勇士である誇りと厳めしさが消えて、人の好い田舎のおじいさんのような感じの人になっておられた。

先生に最後にお目にかかったのは、前述の二十回忌法要の時であった。先生は僕を見るなり「三宅君、久し振りだね。私はもう八十になったが、この通り元気で、朝五時に起きて新聞配達をやっているよ」と言って笑われた。

落合大尉は終戦後どうなさったのか、今もさっぱりわからな

い。優しく、思い遣りがあり、教官室でよく映画の話をされた。
　ある日、「三宅、映画を見に行こう。阪妻の「生ける椅子」を見に行くから君も一緒に来い」と誘われた。僕はまだ閉所ノイローゼから完全には解放されておらず、大きな建物の中に入るのを出来るだけ避けていた。あれだけ好きだった映画も数カ月見に行っていなかった。しかし、落合大尉から誘いの言葉を聞いた時、大尉が横にいてくれたら大丈夫かもしれない、とふと思い、二人で新京極へ行った。
　不思議なことに、映画館の中でも、僕の心臓は平常であった。これが切っ掛けになり、また僕の映画館通いは頻繁になっていった。

山城２回　森森男